

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第七話

*

日曜日でもまた東京は内臓までとろけるような暑さだった。

地下鉄駅を結ぶエスカレータは休日の疎らな人影を乗せて動いていた。上昇と降下が二列ずつ並んでいる。長くて急勾配の激しい流れは初めて利用する者の脚をすくませる。

大きなリュックサックを肩に掛けたビンセントとアレサが腕を組んで降下用エスカレータに同時に入った。続いてブリジス、香村と入った。ブリジスも荷物を抱えていた。体を密着させて恋人たちは狭いギザギザの段で神妙になった。

アレサが男の腰に腕を回すとビンセントはスリムな足を女の股間に入れてきた。二人はエスカレータのベルトに寄りかかった。チューインガムを口で挟んでブリジスはウンコチャンウンコチャンと囁いた。犬の糞と氷塊のはいったビニール袋を取り出して得意顔で香村を見上げ、披露した。そしてにっこりと笑い二段下のビンセントの背中に氷と糞を放り込んだ。

悲鳴が上がった。通行人たちの視線がいっせいに集中した。ビンセントがブリジスの腕を掴んで袋を奪うと、ブリジスはその手を払って安全地帯に飛び乗った。ビンセントはブリジスに襲いかかりアレサがその反動によるめき転倒した。二人は絡み合いながらエスカレータより早い速度でいっきに坂を滑り落ちていった。ビンセントのリュックからは大量の氷が詰まったビニール袋が飛

び出して落下していった。

ホームに電車が滑り込んできた。騒ぎを聞きつけた駅員がプラットフォームを全速力で駆けてくる。エスカレータの終着点で氷と二人の外国人が重なって落ちていった。駅員は二人に押しつぶされ、帽子を飛ばしてコンクリートに腰を打った。回りには氷が散乱している。

乗客がどっと降りてきた。人込みを掻き分け、ブリジスとピンセントは逃げていった。電車が発車する。しかし電車の開いた窓に手を掛けてブリジスとピンセントは飛び乗ろうとする。電車のスピードに振り落とされ、二人はホームに飛ばされた。前方から警備員と体格のいい駅員が駆けて来た。二人は引き返し、上昇エスカレータを一目散に駆け登っていった。

起き上がった禿頭の駅員は氷に滑ってまた転んでいる。二人の逃亡者はその無様な姿を高笑いしながら見下ろし、他の乗客たちを追い抜いていった。

逃亡の末二人は地下街の薄暗い一角に置かれた証明写真を自動撮影する箱のなかへ隠れ込んでいた。二人が灰色のカーテンの隙間から外を覗き窺っていると警備員と顔を真っ赤にした禿頭の駅員と表情のない警官が速度を緩めずに通過していった。アレサと香村の姿を見つけるとブリジスは親指を突き立て、女が同じ合図を彼等に送った。

箱のなかで彼等は吹き出す声を殺して目を輝かせ、体をぶつけあっていた。

「もう大丈夫！ 出て来なさいよ」

アレサは叫んだ。

「行ったか？」

「大丈夫！」

女が手招きをするとカーテンを開けて二人が出てきた。四人のチンピラがいっせいに声を出して笑った。

*

アレサが丸椅子の高さを調節して腰掛けた。ブリジスが女の膝に寄りかかるように座り、ピンセントは腰を屈めて女の肩に腕を回した。香村は中腰で女の頭の上に乗せた。汗が脇の下や背中を滝のように流れ落ちている。

ブリジスが銀貨を入れボタンを押した。四つの顔が卒業写真のように並んだ直後、フラッシュが焚かれた。

罪人ブリジスは数秒の沈黙に我慢できずに吹き出し、つられて全員が笑った。二度目の火が焚かれた。

*

数分後に赤いランプは青に変わるだろう。記念写真は吐き出され、取り出し口のポケットで乾燥風に吹かれている。乾きを待った。

四連続画はアレサの顔だけを見事に拡大して写し、男たちの顔を切断した。写真を見て女はゲラゲラと笑った。

ブリジスは写真を箱に備えつけてあるミラーにチューインガムで貼り付け、その上にビンセントがマジックで指名手配！と書いた。日本語で。

*

3

引っ越しのための小道具と遊び道具を抱えて四人が到着したころには、すでに大中小の段ボールが各部屋に運び込まれて重なり、ひしめきあっていた。サロンでは山積みの段ボールを壁際に押しやって空間をつくり、男三人と女二人がバニラのアイスクリームを食べながらひと休みしている最中だった。

デッサが香村に小さく手を振った。視線をよけると彼女は最上級の笑みで返した。香村は不快になった。

見知らぬ日本女性が木目の床にうるさい花柄のスカートを広げて座り、長椅子の座部を背凭れにして寄りかかっていた。ブリジスとビンセントがコンニチワと言った。女は相手と同じ量の同じ笑い方で応えた。静かで陰影の深い笑みは長い海外生活で鍛えられたものだと思えた。

彼女は遅れてやってきた友人たちにアッサム紅茶を振る舞った。ポールデンの古くからの年若い友人レイナルドとリックはブリジスと派手に抱擁し合った後、借金返済をその新しい親友に迫った。初対面のアメリカ野郎が留学中の学生二人に同じ額を同じ時期に借りた事実がば

れた。

サロンは三十畳をかるくこえた。南東に広がるバルコニー、南西には開閉式の大きな出窓が空中へ大胆に突き出し、そこにうすい緑色の葉をもつ南洋の植物が置かれていた。白壁を基調に室内は淡く、統一された家具のグレーがいっそう落ち着をみせていた。

人々は引っ越しの作業に入った。手始めに男たちはばらばらになったベッドを組み立てた。時間をかけて完成したキングサイズのベッドは寝室を狭くした。ポールデンは大量のスーツやネクタイや下着や靴下をベッドに放り投げると気の置けない男たちを寝室から追い出した。

書斎にはファックスとコンピュータが取りつけられ、何枚かの通信がすでに吐き出され床に落ちていた。周囲を段ボール箱が多数占拠し、日本女性はそこから分厚い書籍や英字新聞紙で包まれた石器や土器を取り出して組み込み式の本棚に一つ一つ納めていった。

レイナルドはテレビとビデオデッキを板張りの床に置いて配線を完了させ、莫大な数のビデオテープを猛スピードで早送りしている。画面には能の舞台や神殿、葬式の場面などがつぎつぎとモザイク状に出現した。

「彼がCIAと呼ばれる理由はこれね」

アレサがモニターを覗き込んで言った。

IBMマウスをカタカタ音を鳴らし、画面に向かって丸紅制作投資ゲームに熱中しているのはリックだ。足下には大量のアメリカ雑誌に紛れ、世界各国の地図が散乱している。

*

主な家具を移動し、段ボールや荷物を一通り運び終わると人々はすぐに飽きて作業を中断した。初めからポールデンの引っ越しに関心があるわけではない。

アレサは当初ポールデンの指示に柔順で籐椅子や装飾品を得意げに並べ、鍋やポットや料理用具や日常品を整理していたが、そのうちバルコニーに持参の石を敷き、玄関には向日葵の花を敷きつめてデッサと喜んだ。

ブリジスは浴室の壁にマジックで落書きをはじめ、ピンセントは広い回廊の天井から壁にかけてペンキでポッ

プアートを描いた。誰もが空間を私的に装飾し、部屋を自由に変形していった。

*

JVからファックスが届いた。ソウルでの香村たちの飲食代請求書と引越しに対するメッセージだ。プリジスが披露した。

いかれポンチの諸君、ドイツの新邸に火をつけろ！！

俺は元気だ、おやすみ人生！

人々は一斉に拍手し歓声をあげた。

移動祝祭日、万歳！

それはあきらかにドイツ氏ボールデンの悪夢の始まりだろう。

人々は楽しんでいる。主自身も侵略者たちの蛮行にあきらめ、なすすべもなく寛容になり、ガムテープの剥れた段ボールをつぶして足を掛け、ベッドに横たわって分厚い本を読んでいる。砂色の髪をを掻きながら。人々をもてなそうとする意欲はさらさらしない。やがて彼は眠り込むだろう。

5

*

緑地帯が点在し利便性と静寂を兼ね備える白金台にボールデンの高級マンションはあった。五つある大部屋はそれぞれ個別に小パーティを開けるほど大胆な空間だった。実際勤務する会社から近いこともあって週末にはかならず複数の部屋で異なる夜会が催されていた。そのマンションを離れ、運河が走り工場と倉庫群が乱立する埋立地月島に建設された新築の十五階建分譲マンション最上の角部屋にボールデンは移ってきた。

*

赤いカマロス・ソノーラをキッチンの床中心に置いた。ベーコンに無造作につつまれた海老がチーズを被ってい

る。米はカリフォルニア産。回りにケチャップを敷き、小麦トルティーヤを山と置いた。丸ごとのレタスとトマト、カイワレをばら蒔き、ぶ厚いチーズを添えた。紙袋からハラペーニョの封を開け、自慢げに香りをたしかめた。

腕を振る香村の姿を日本女性は興味深く眺めていた。彼女は歯科医だった。ボールデンと同じ四十ぐらいだろう。

「料理、好きですか？」

「食べることなら負けないんですけど。細身で大食いなんです」

女は短く笑った。

「料理はしないけれど買い物にはよく付き合わせられますの」

「ボールデンは買い溜めしないでしょう」

「買い物籠下げたお母さんたちの手が伸びるのはきっちりラップされたものだとおもいます。ラップされて、蒸気を受けて、青い光線を浴びている。瓶や缶やパックの触れ書きがあって、誇大な広告以上に衛生や安全保証の印は有効ですね。でもだめ。私の食感は貧しいんですけども」

女は見事に香村の質問をかわした。

「名前は？」

「え？」

「あなたの名前です」

「ルリといいます」

*

出荷日や生産日。賞味期間。着色色素名。成分。グラム数や値段。表示の札。バーコード。あらゆる記号が氾濫する。野菜や冷凍ものは、白い蒸気が当てられ、青いライトを浴びている。旨味と鮮度と気品を誇示する演出は涙ぐましく、何段かに仕切られたボックスに食品は幾らかの安全と安心を抱き合わせで収納されていく。

だが食品群は人々が迷うほど選ばれてはいない。人々はボックスへ腕を伸ばしては値札に溜め息を付き、黄色い買い物籠に収まる掌にのる重量だけを感じる。

スーパーマーケットで信じられるのは質量だけだ。

*

料理は人々の喝采を浴びた。

大皿に盛られた料理が車座になった男たちの掌と口で
凄じい早さで征服されていった。料理の山をわし掴み、
女たちは意味のない乾杯を何度もぶつけあった。

アルコールと紫煙で部屋の空気は澱んでいった。部屋
に刺し込んでいた強い西日は息を引き取るように消えて
いったが、気温は体温を超えたまま一向に下がる気配が
なかった。

人々の胃は満たされた。酒も脇役となり、アレサは空
になった酒瓶に乗って曲芸を楽しんでいる。スキンヘッ
ドのブリジスは女装して指揮棒を振り回し、ビンセント
が操られ、花の茎を口にくわえて踊り、レイナルドを誘
って母国のタンゴを披露した。ダンスの最中レイナルド
は花びらを食った。リックはワインを煽って、ルリを口
説き落としている。頑強な小男ポールデンは裸になって
フィリピーノと抱き合い、ワルツで回りながらバルコニ
ーへと移動していった。

湯気のない料理が散乱している。アンコールに答える
食材はもうない。

ポールデンはバルコニーからとっぴりと暮れた東京湾
を目掛けて、酒と小便を空中へ撒き散らしはじめた。

*

アーモンド状の月が南にあった。寢室の採光窓のした
にラテン語で書かれた本が閉じられないまま放置されて
いた。窓辺にはマイセンの壺。優美な曲線をみせるルー
ムスタンド。傘の影を受けて陶器オブジェは立ち、ポー
トレートが脇に捨てられている。

バルコニーから覗く寢室は他の各部屋と同様安易なワ
ール・ヌーボー調で統一されようとしていた。

ポールデンは全体主義を嫌悪する。美に革命があると
すれば恋愛によって安易な取り壊しが図られる。

*

「浅はかな奴だ」
ブリジスが言った。
「あいつの魂胆みえみえだ」
「いいじゃないか」
香村がブリジスとバルコニーで話をしているとデッサ
がやって来た。
ブリジスは気を効かして何も言わずに消えた。
「何だか久しぶりね」
「二日会ってないだけだ」
香村はブランデーをゆっくり飲んだ。
「ホテルは快適だったわ」
言ってデッサはロッカールームの鍵とカードを香村に
手渡した。
「ロッカーと一緒にケイも借りたわ」
「不幸な一日だな」
「二人で毎日ホテルの部屋にお花飾って、水浴びして、
写しっこしたの。美味しいワインと料理で五キロずつ肥
ったわ」
「とうとう雌豚に成り下がったか。めでたいね」
「その通りよ」
「J Vは元気そうだね」
「知らない。J V気になるの？」
「挨拶代わりさ」
「くやしい？」
「何が？」
「会えなかったこと」
「いや」
「ファックスのとおり、どこかで彼はお休みしてるはず
よ」

東の房総半島から東京湾、西部の工場地帯まで一望で
きた。昼間であれば視界はもっと広がるだろう。

廃棄物でつくられた人工島のうえをジェット機がラン
プを点滅させて西へ鋭角に降下していった。運河を抜け
た貨物船が湾内をゆっくりと沖へ進んでいる。地上では
荷物を積み込んだ大型トラックが倉庫をつぎつぎと発進
していった。

「人生を休み、飄々として楽々と人生を生きて、たっぷり呼吸し、醒めながら眠りつつけてる。羨ましいでしょ、あんた」

「眼を開ければどんでん返しが待っている。用意周到に。葉巻をくわえながら軽々とやるんだろう。かなわないね。具体的で圧倒的な世界がJ Vの前では容易い一行だ。そしてそれはかならず完結する。そうしてまた笑っておやすみの人生。始末悪い」

「そうね始末悪いわね」

「一生遊べるだけの財を持ち合わせている。そしてひとつひとつ食いつぶしながら生きている」

「その通りよ。東京に七つのビル。二つのレストラン。ホノルル。ホンコン。そしてソウルに数十のレストランとホテルを経営し、シドニー、プーケットに別荘を持っている」

「そんなのどうでもいいさ」

「あんた彼をもっと知らなければならない」

「具体的に知る必要があるか？」

「少なくとも彼、あんたを徹底的に調べているわ。パートナーとしてね」

「間違いだ。J Vが僕を調べたとしてもそれは徒労に終わる」

「そうかしら」

「何も無いもの」

「相当の自信ね」

「ホテル暮らしのあとどこへ行ってた？」

香村は話題をそらした。

「ケイはいい女ね」

いつものようにデッサは答をくれない。「ケイとはもうあんた以上の関係よ」

デッサは大声で笑った。

「うろたえてる」

「醜い雌豚の関係だろ、以上も以下もない」

「賄賂の効かない国なんてお呼びじゃないって」

「何だよそれ」

「J Vが言ってた」

「そんな国地上にあるのか」

「そろそろ中へ入りましょう。皆が待ってるわ」

「今日、うちへ泊まっておいでよ」

「ケイといっしょに伺うわ」

「グッド...・アイデアだ」

*

人々は匂い当てゲームをはじめた。ルリが窓を閉め、ピンセントが空調の冷却つよめた。アレサが灯りを消して蝋燭を灯した。

身分を決めた。王様がボールデン、豚がブリジス、残りは奴隷となった。豚と奴隷たちに目隠しがされた。アメリカ豚ブリジスは四つ足で這い鼻を床に押しつけて吠えた。ブ、ブ、ブ。奴隷たちはいっせいに笑った。

ドイツ王ボールデンは更に物体を乗せて豚に差し出した。豚は探知できない。ドイツ王が皿を右足先で豚の鼻へ近づけてやった。豚は反応し、四つん這いのまま思考した。答が出てこない。豚はさらに鼻を近づけて匂いを嗅いだ。鼻が物体に接触し、顔面が生蛸にくっついた。豚はのけ反ってウオーと雄叫びを上げた。全員が笑いこぼした。

提供物はしだいに奇を衒い、難を極めていく。ルールは王の気まぐれで自在に変えられるから、いったん豚に落ちた者が陰惨なカーストから抜け出すのはなかなか難しい。ドイツ王の命令で裸になったアメリカ豚は四つ足でさ迷っている。

ようやくドイツ王の座を引きずり落としたのはスペイン奴隷アレサだ。目隠しを外した女王スペインが立ち上がり驚鼻をさすりながら宣告した。

「多くのことがあなたがたに起こるだろう」

まるで新興宗教の教祖だ。

「大きな壺を用意して。ルールを変える。外したら一回ごとに全員ジャックダニエルの一気飲みよ。心配はいらない」

奴隷たちが一斉に歓声をあげた。女王は匂いの種を壺に入れていった。クコ茶。コリアンダーシーズ。ハーブ。ローズマリー。ガラムマサラ。オレガノ。セージ。カモミール。丁字。・・・

「自己を否定するのではないわ。超克するのよ。この壺には十種の香辛料が入ってる。それを全部当ててちょう

だい。あなたは幸いだ。新たな感覚が開発される。もっとそばへ、もっとそばへ」

勝敗は明らかだ。

「刑を執行する。さあ豚クン、私の足をおなめ」

ブブブブ。豚は舌を垂らしながら四つ足で女王に近づき、左足親指にキスをした。全員爆笑した。

オールスパイス。カイエンペッパー。ターメリック。パプリカ。山椒。月桂樹。カーダモン。タイム。クローブ。コリアンダー。シナモン。チリペッパー。唐辛子。ローリエ。セロリーシーズ。八角。メース。パジリコ。この日のために手に入れたロコト。そしてフェンネル。クミン。

女王スペインは匂いを壺に加え、容赦なく豚に嗅がせてその神経細胞を殺していった。

奴隷たちは一人また一人とゲームを離脱した。絶対権力と威光を発揮する女王アレサ。ブリジス豚の鼻孔は麻痺し、負けが込み、その度にジャックダニエルを飲まされ、全身黄色ペンキで塗られていった。

豚は屈辱と羞恥にますます狂喜し、奴隷たちの喝采は熱くなった。

1

*

バブバブバブ、バブバブバブ。アメリカ豚が鼻を床に押しつけている。豚の嗅覚は壊れ、豚は目隠しのなかでやがて倒錯し、ゲームと現実をすり替えていくだろう。意識と無意識にふらつき摩滅され役に立たなくなった末梢神経を存分にいたぶる。人々は豚の狂気に誘われ、ブリーフ姿のアメリカはますます豚になりきっていく。

ウブウブ、ウブウブ、ブブブ・・・豚が吠えた。戦争だ！ バブバブバブバブ バブバブ 蜂起せよ！

ブブブ、ブブブ、ブブブアメリカ豚は四つ足の状態から前足二本を天井に突き上げ、雄叫びを上げつづけた。もはやゲームは成立していない。

レイナルドが四つん這いになって吠え、リックは服を脱ぎはじめた。三匹の豚が雌どもの太腿や腰回りに纏わり付いて匂いを嗅ぎまくった。ウブブブブブ！

男たちは手を打って笑転し、女たちは呆れて雄豚を蹴

飛ばした。人々は失明し、口先は吃り、鼻だけを頼りに、
場末をうろついてゆく。

僕等は豚のように生きる。

バブ、バブ、バブ敵はどこだ。

敵は何処にいる！

隠れてやがる。

奴をぶん殴れ。バブバブバブバブバブ

戦争だ！

戦争だ！ バブ、バブバブ武装せよ！

今すぐに武装せよ！

金日正のパンツ万歳！

ホメイニパンツ万歳！

カダフィパンツ万歳！！

バブバブバブ、バブバブ・・・・・・・・

そのとき銃声が轟いた。

続けて二発閃光が走り、発砲された玉が壁に食い込み、
小動物のように振動した。アレサが悲鳴を上げた。デッサ
はレイナルドの膝にもたれかかった。

カッと目を見開き、ブリジスは瞬きできずにいた。ル
リは香村の足下に倒れてブルブル震えていた。目隠しを
したままのリックはまだ状況を把握できない。身を翻し
て壁際に逃げようとするが体が動かなかった。デッサの
震える右手のグラスからマホガニー色の液体が零れ、ブ
リジスの膝と床を濡らした。ビンセントは黒い目隠しを
首にぶら下げ、腰を抜かして座り込んでいる。ボールデ
ンは万歳をして固まっていた。右手に握り締められた拳
銃からは白い煙がうろたえるように上っていた。香村は
呆然と突っ立っていた。唾を飲んだ。両足の震えが止まら
なかった。

やがてボールデンが卑屈に笑い出した。それを見てブ
リジスは引き攣るようにヒクヒクと笑った。口の回りで
皺が膨れ歪んだりした。ビンセントも恐怖の混じった顔
で笑いだした。つられてレイナルドが笑いだした。デッ
サもルリもくすくす笑いだし、香村とリックが加わった。
一瞬にして凍りついた時間が溶けていくようだった。や
がて笑い声は渦となり、野豚たちははしゃぎまくった。

マンションの他の部屋では扉も閉まり、鍵が掛けられ、団欒やありふれた恋の達成や他愛ない喧嘩も終わり、すでに眠りに就こうとする時刻、一室だけが山火事を犯し、空中でふらつき浮かんでいた。

下界を見下して地底から遊離する。夜明けを拒否し、酒と怪しい匂いがばら蒔かれ、踊り、息を切らして狂乱する。誰もが浮かぶように存在し、意志は、意識は、無意識は、天井を突き抜け、空高い神様を笑い、サイコロを振りつづけ、ドイツを転がし、アメリカを転がし、フィリピンを転がし、スペインを倒し、野豚の夜は狂いつづける。

*

傾いたムンク。
夜になれば街のノイズは少しは収まるだろう。
聴こえるかい？

1

*

香村はデッサに近づいた。
「なぜよくしてくれるの？」
香村は軽く触れるまでさらに近寄った。
「J Vが君にやさしいからさ」
デッサの胸が溜め息とともに大きく上下した。
「そして君は頭がいい」
香村の指がデッサの髪から頬をさらに顎にかけてゆっくりとカーブを描いていった。顔を上げさせ、最後に唇をなぞった。女の唇は湿っていて、指の動きに反応して薄く開いた。女は両腕を男の首に巻きつけ、舌を香村の口の中へ滑り込ませた。
何度も魚が向きを変えた。十分すぎる時間を二人は背中マラーを聴いた。
「ここは売春宿じゃない！」
突然香村は呟いた。
「何言ってるのよッ！」

デッサが一瞬惨めな顔をした。

*

顎の下を鮮血が流れた。

昨夜香村は髭の手入れをしないで翌朝出勤した。その後デッサがいつ頃目を醒まし起き出したかわからない。おそらくは午後強い陽差しを受けながら強いコーヒーを飲んだ。体を洗い、高い体温を落とし、剃刀を新しい刃に変えて産毛を剃った。そして男のように髭の手入れをした。石鹼を溶いて顎に付け残りを剃りあげた。髭の付着した刃物を花の上で洗った。セロハン紙のなかで花は腐っていた。細い数ミリほどの髭が花びらに触れて茎のさきを嫌うように回避し流れ落ちていった。髭は植物のようだった。

男はひたすら髭を剃った。一本の髭も残すことなく、丹念に、静かに力強く。鏡を覗き続ければ視力はだめになる。平静を装い、ひび割れた鏡のなかで焦点を狂わせ、背景は流れ出し、そして過って肉片を切った。顔、腕、胸、腹と剃り、出血を押さえ、足を滑り、爪を擦り、壁を剃り、深い夜の肌を何遍もカーブした。

香村はシャワーのあと浴槽につかり一眠りした。シャワーを投げたまま。

浴室を出た。音楽は停止していた。ラジオのニュースが台風の動きを伝え、続いてマルコス前大統領のていたらくと大統領夫人の世紀の浪費家ぶりを裁判にかけると伝えた。ラジオを切った。

雨足が一段と激しくなった。夏は息切れしながら季節を越えようとしている。だが何も終わってはいないと香村は思った。雨は朝から降り続いていた。

第八話

*

冷蔵庫からハーフボトルの缶ビールを二本取り出した。
ガスレンジの抓みを捻ると青い槍状の炎が輪環をつく
った。腰を屈めてその火で煙草を燃やした。息を吸うと
酸素が吸入され先が赤くなった。煙草を吹かしながら缶
ビールを飲み干した。

ストレートの髪は乾いていなかった。部屋には空調機
のフル回転する摩擦音が響いていた。二本目の缶ビール
を飲みながら香村はしばらくの間ベンチでぼんやりした。

*

床に置かれたダイヤル式の黒い電話が鳴った。

「ずいぶんと手間取ったわ」

ケイの声だった。

「何度も電話をしたのよ。帰り遅かった？」

「音楽かけて寝てた」

「そう、それじゃあ聴こえないわね。明日の朝になるわ」

「何が？」

「出発。明朝出かけることにした」

「何処へ？」

「以前話してたスリランカ」

香村は電話の本体といっしょにベンチへ移動した。

「取材？」

「もちろんよ」

「いつも通りだ」

「え？」

「ダイヤルするときにはいつも最後通告」

「キミに報告の義務なんてないわ」

言ってケイはレシーバーを爪で弾いた。

「ばかばかしいから切るわよ」

*

ふたたび電話が鳴った。

「彼女は出てほしいよ、君に」

「彼女の気持ちになれるのね」

「だって当たり前だろう」

「そうかしら」

「どうかしてるよ」

「単なる儀式でしょ」

「君が決めるな」

「いいえ、私が決めるのよ。妹の結婚は私の挙式でもあるわ。あなたの始まりでもあるでしょう。神妙な挨拶、じれったい会話、意味のないセレモニー、料理は冷めていて、でも妹を祝福する万雷の拍手の渦、最高の笑みといっしょに人々は新しい契約をする」

「契約？」

「そう契約」

「おかしなことを言うわね」

「祝福すればいいんだ。意味もなくただ拍手して祝福すれば・・・」

「祝福？」

「そう、祝福」

「私はいつも彼女の幸福を願ってきたし、これからもそうよ」

「・・・」

男の眼球が曇った。

「私がいてもいなくても特別何も起こりはしない・・・」

女は口を塞いだ。

「君はそばにいた方がいいよ・・・」

「式場は幸福で退屈ね」

「いつもと変わらない。万事無事に進行する。それがマリエが望んだ儀式だろう」

「どうしてわかるの？ あなたに」

ケイは冷静だった。

「妹の気持ちが。なぜあなたに分かるの？」

「.....」

「これから何かが確実に、それも予測不可能な出来事が起きようとする場所へ、私は行きたいのよ」

「何も一週間やそこら遅れたとしてもいいじゃないか。どうかしてるよ」

「一週間？ 一日の遅れでも大変なことよ。近づきたい

の。一刻でも早く新しい場所へスリランカへ、どこでもいい、近づいていきたいのよ。それは単に一日時間が遅れるということではないわ。新しいものへ向かおうとする私の気持ちが整理できないの。気持ちが遅れてしまうのはよくないわ。時間ではない・・・その気持ちに素直になるには、あえて、・・・あえて大切にしてきたものを踏んづけてしまう方がいい。そうして犠牲をつくって脱出しなければ何も始まらない。何もかもが遠くなる。待っていてはくれない」

「君は変わってない」

「私は変わらないわ」

「変わらない。そして残酷だ」

「残酷？」

「そう。みんな捨てていくんだろ」

「人はみんな残酷でしょう。」

「彼女は君に見てほしいよ、きっと。誰れよりも...」

「マリエはわかるはずよ。私たちはいつもこんなふうに生きてきたんだもの」

「.....」

眼球が洪水であふれた。

「わかるでしょう？」

「わかるよ、それは。でもそれはおかしいよ.....」

「.....」

「頭が痛い.....」

「.....」

「痛いよ、壊れそうだ.....」

「大丈夫？」

「もうこれ以上、自分を追い込むなよ」

*

ケイが要望したパエリアを突き、酒を飲んだのは金曜日の夜だった。半年の不在を埋めるように。それだけでは足りない日々の空虚をなぞるように。料理を食べながら、話をし、男は女の危機を察知し、女は男の揺れと不変を確認した。

長いおやすみのあとベッドのなかでケイは白いシーツを握り締めて言った。

「このケリは自分自身で付けるわ。それが私たちの流儀よね」
「かなしい流儀だね」
「私たちは交歓できない」
「燦燦と光線が降り注ぐなかで、永遠の聖地で背中を向け合い」
「口を開けたまま笑ってる」
「笑うのか」
「そうよ。そしてキミにはキミの、私には私の狂気があるわ」

*

香村はファイバーグラスの天井を眺めながらプールに浮かんでいる。

プール全体が青白い光線を受け、ときおり水没する香村の顔に照り返している。

1

*

贈物って何？
何でも知りたがるのは損よ。
何？
欲ばりね。
後から知ったほうが喜びが倍になる贈り物よ。
そうか。
出発は何時？
わからない。
式は定刻に始まる。
そうね。
出られなくってもせめて花嫁の姿ぐらい写真におさめてあげたらいいだろう。
ふふふ、いいじゃない。二人はお似合いだわ。完全無欠のお似合い。それだけで何もかも十分。
お似合いの恋人を撮りたいんじゃないのか。
うん、でもいいの。あなたはぜひ出席してあげてね。
そんなのないよ。

彼女はとびきり豪華な結婚式に憧れていたわ。式の日だけは神様に反抗するのって。贅沢の限りを尽くして、でもしっとりとしていて、威風堂々で、品格があって、あったかいもので全編貫きたいわって。

平和だね。

そんな言い方は止めて。

・・・そんなつもりじゃない。

あなたの気持ちはわかるわ。平和の扱いはあなたのほうが数倍も上でしょう。それを記念写真に納めてちょうだい。

平和を扱う？

そのほうがあなたには、それこそお似合いだから。

それは僕への最大の皮肉だろう。

いいのよ。

見当もつかないよ。

いいのよ、もう。・・・私にはとてもむずかし過ぎるわ。・・・ 昨日の夜、デッサに電話をもらったわ。彼女、私を励ましてくれたわ。嬉しかった・・・ どうして黙ってるの？ ・・・ねえ聴いてる？

うらやましいよ。

どういうこと？

いいんだ。

向こうから、電話くれよ。

*

香村は水中を潜伏している。照明で体が白く浮かび上がっている。

いつまでもこうして水にいよう。ファイバーグラスの夜空を見ながら、水中に隠れていよう。指先はふやけ、水かきに変化するだろう。ヒレも生える。

*

「出来事を追うからだめなのよ、ケイ」

「置いてきぼりを食うのはきっと私の才能のなさね」

「その不安は自惚れよ。誰も才能なんか認めなんかしない。甘えてる」

「デッサ、あなたはこれからどうするの？」
「歴史なんてどうでもいい。あんた多くのことを求めすぎてる」
「わからない」
「激突なんて、歴史とぶつかるなんて、そんなの甘えだ」
「・・・」
「標的は歴史じゃない。あんた自身が事件を起こすのよ」
「・・・」
「あんたはとても有能よ」
「ありがとう」
「・・・」
「デッサ、あなたはどうするの？」

*

頭の後ろから小さな波が襲って、プールに浮かぶ香村の口を水が一瞬だけ埋めた。喉を反らして浮力をつくと耳が完全に水中に埋没した。

水面の延長にはプールサイドが見える。だれもいない。銀色のベンチが乱反射している。BGMはない。ケイ、デッサはどんな言葉で君を癒したんだ。このまま魚になろう。

*

教会のうちは晴れるかしら。

決まってるさ。君は飛行機の座席に座っている。シートベルトを静かにはずして、よく冷えた水をうまそうにひと息に飲むだろう。女が機内食を運んでくる。君は銀のナイフとフォークで自在に切って口へ運んでゆく。

そして結実される妹の幸福を空の上から祝福する。そう。

それでいいのよ、ね？

・・・

ケンカはもう嫌だわ。

*

.....なぜこんなにプールの水は生暖かいんだ。

*

とても解放的で、自由に見える。だが暗く閉じられた世界のなかで、それは湿りつづけているのかも知れない。僕達はひっそりと息をしつづけてきた。侵入者はつねにあった。誰なのかわからず、多くの隣人がいなくなり、つぎの侵入があり、通り過ぎて、死に、殺られ、どこかで何かが始まった。そしていつのまにかできごとは終了していた。

人々は一様に無関心で、すぐに忘れ、いっさいは進んでいった。僕達は交わらない。ケイも香村も断片に拘りながら、しかし断片的な言葉を信じていない。二人はあざ笑いながら認め、軽蔑するのだ。誰もが物語の中を生きようとするのを。弱々しい断片を整理しなければならない。

香村には突き動かすためのケイの圧倒的な質量が必要だった。空洞化した、だが麻薬のような言葉の羅列。大量に吐き飛ばされる唾のような言語。フィルムのような山が必要だった。

だが、それも終わる。テレビの画面をブチッと切るように突然終わる。何も解決されない。つねにそうだ。そのときもまた空は青く、解放されてかなしくて自由だろう。二人は絶滅する。

*

「またしばらく会えなくなるね」

「そうなるわね」

「さみしいね」

「そうね」

「今度会えるのは秋か」

「秋も終わってるかもしれない。また新しい料理たべさせてね」

「ああ、いいよ」

二人は同時に電話を切った。

そして香村は受話器を降ろさず握り締めたままホテルの番号を押した。予約系の機械的な声が返ってきた。

「最上階。いつもと違うところで」

「ええ、空いております。お部屋は如何なさいますか」

「シングル」

香村は正装した。

*

僕らを殺しにくるのはテロリストたちではない。

より個人的で、整然として、断片化した日常の延長に、それはある。潜むようにある。それは終わりのないテロだ。際限もないあるいはいたるところで勃発して、燻っている。あるいは泥沼化して、解決策もなく、でも流血はなく、吐血もなく、かすり傷さえ見えない。痛みもなく、無為の、しかし豊かな日々よ、間違いなく。それでも虚実の日々は経過していく。全体は淡い日差しを受けてそれはくるくると回っている。死骸が無数に転がっている。

どんよりとして息が詰まる春のような温和がつづくのよ。

春のような温和か・・・

時折日照りが続く。でも寒くて寒くて私は日常に毛布をかけて寝るの。滑稽でしょう。

愛は成就されるのか。

ええ、そうよ。

嘘だろう。回りから対象が全部消えている。

考えすぎよ。

柔らかな日差しを受けてくるくるくるくる日常は回転するんだらう。

私たちは向かう。かならずそれは起きる。くるくる回転し続ける温和な曇天の風景に引きがねに指掛けて生きていく。歳をとるたびに、果たして、それは近づいてくるのか、むしろ遠ざかっているのか。

どうだっていいさ。いずれにしても僕等はその日のために準備をしよう。逃げることも含めて。

そうね。……そうね……

*

砂利道を歩いていった。

車まで辿り着くのに黒い背広はずぶ濡れになった。

振り返った。家の灯りが雨で煙っていた。後ろの林が風で動いた。上空を鳥が飛翔した。エンジンが鳴った。バンパーから吹き出る煙がサイドミラーに映った。ライトをパッシングさせ発進した。庭と舗装道路の境界で車を停止させ一瞬ポーターとした。

ガラスとボンネットで雨が激しく跳ねている。ワイパーを作動させた。ハンドルの感触を指先で確認した。曲がった煙草に火を点け深く吸った。吐いた。

砂利道もアスファルトも大粒の雨で叩かれしづきを上げていた。火の始末をせず煙草を外に捨てた。降ろした窓の透き間から雨が吹き込んだ。顔と首がまた濡れた。

アクセルを踏んだ。一つ目の信号で止まった。ブレーキにタイヤがきゅっと泣いた。

赤ランプを点灯させた終バスが尻を大きく迂回させて曲がっていった。雨はますます強くなった。

環状線と垂直にぶつかった。交通量は少ない。右折。片手で首からネクタイを取りアクセルに力を込めた。高速への入口は近いと感じた。

弾丸のような雨。アスファルトが乾いているように見えた。一瞬だけだろう。

埃のような何か。